カルピスをありがとう

　ももねえちゃん。母の妹、つまりです。小さい頃から、ももねえと呼んでいます。

　小生は、生まれた年に父が亡くなり、母が働かなければならず、祖父、祖母に育てられました。

　小学三年の頃、初めて一人でバスに乗り、叔母の嫁ぎ先に遊びに行ったときのこと。わが子以上に歓待してくれて「悠ちゃん、これがカルピス、うまかよ。よ飲みんしゃい」と言って、コップに白い液体と氷の音が……懐かしい味です。テレビも、ストーブも、カルピスも、叔母の家で初めて知ったのです。帰りのバス賃、ノート類など買ってくれました。母と違って体格のいい京塚昌子タイプの叔母が、小生の駆け込み寺だったのです。でも、叔母の夫のがあればこそ、その待遇は得られたのですね。

　四十歳過ぎた頃、やっと実感して、叔父にありがとうをと思ったのです。年を重ねるごとに叔父・叔母に対する心の愛を実感している五十五歳です。

応募時（東京都55歳）加唐悠嗣